

氏名	植野 貴志子
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	乙第71号
学位授与年月日	2017（平成29）年9月21日
学位授与の条件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	Speaking as Parts of a Whole: Discourse Interpretation from <i>Ba</i>-based Thinking
論文審査委員	主査 藤井 洋子（英文学専攻 教授） 副査 松森 晶子（英文学専攻 教授） 副査 清水 康行（日本文学専攻 教授） 副査 井出 祥子（本学 名誉教授） 副査 三輪 敬之（早稲田大学理工学院 教授）

論文の内容の要旨

本研究は、アメリカ英語（以下、「英語」とする）との対照を通じて顕在化する日本語の言語使用の特徴を明らかにしたうえで、既存の語用論理論が、それらの特徴、および、その根底にある論理を適切に説明するには不十分であることを指摘し、さらに、既存の語用論理論を補完する考えとして「場の思考」（清水 2003, 2004; Hanks 2016; Otsuka 2011）を取り入れ、日本語談話の解釈を試みるものである。

本研究は、七章から構成される。第一章では、本研究の動機と目的を述べた。既存の語用論理論は、一様に「会話行為の理性的性質」（rational nature of conversational activity）（Levinson 2000）を大前提としている。例えば、Brown and Levinson (1978, 1987) のポライトネス理論は、「フェイスをもった理性的な動作主」（a face-bearing rational agent）が、コミュニケーションの目的を達成するために、「意図・認識」（intention, recognition）に基づき、理性的に「方策」（strategy）を選択するという前提のもと、あらゆるタイプの発話を理性に還元しようとするものである。英語会話においては、個々の意思に基づく情報伝達が重視されることから、その言語使用の大部分は既存の理論によって説明される。一方、日本語会話には、それらの理論的前提にそぐわない現象がたびたび観察される。その一つは、複数の話者の発話が、互いに重なり、繰り返されながら、あたかも一人の口から発せられるように融合的に連なる現象である。こうした現象は、各々が自分の発話を完結させる英語の「対話」と対比して、「共話」（水谷 1993）と呼ばれてきた。共話的な話し方の基本は、あいづちを打って理解や同調を示し、相手の言おうとしていることを察して、その先を引きとり、あとを続けることで、複数の話者が対立することなく混然一体となって一本の流れのある談話をつくるというものである。ここでは、話者と話者の認識状態が近似し、融合したかのようであり、個人が意図・認識に基づき理性的に方策を選ぶという語用論理論の前提が当てはまらない。日本語会話におけ

る言語使用の特徴は、既存の理論だけではなく、新たな理論を導入することによって、より適切に説明されると思われる。本研究は、それを可能にする方法の一つとして、自己と他者は深いレベルで繋がり、「場」という全体の部分としてはたらいっていると考える「場の思考」(清水 2003, 2004; Hanks 2016; Otsuka 2011) を取り入れる。

第二章の前半では、語用論がデカルト派言語学者である N. Chomsky の徹底した理性主義の肩の上に立っていること (安井・奥田 1990) を指摘したのち、語用論を牽引してきた Grice (1975) の「会話の含意」(conversational implicature)、Lakoff (1973)、Leech (1983)、Brown and Levinson (1978, 1987) らによるポライトネス理論を概観し、それらが理性主義を貫くものであることを論じた。第二章の後半では、既存の語用論理論をもって適切な説明ができないと思われる日本語の現象として、「共話」(水谷 1993) に加えて、社会的慣習によるところの大きい「わかまえ」(Ide 1989) の言語使用を挙げ、それらに関わる先行研究を提示した。

第三章では、本研究で使用するデータ、ミスター・オー・コーパスについて説明した。ミスター・オー・コーパスとは、言語使用の異言語異文化比較を目的として同一条件を設定して収集した日本語、英語を含む六言語の談話資料である。初対面の教師と学生、親しい学生同士の二種類のペアによる三種類の談話(会話、課題達成談話、語り)の映像と書き起こしが収録されている。本研究は、教師と学生、学生同士のペアが「びっくりしたこと」というテーマを与えられて行った日英語会話をデータとする。

第四章では、初対面の教師と学生による英語と日本語の会話における問いかけを分析し、英語の問いかけを「個人志向の意思に基づく発話」(individualistic volitional utterances)、日本語の問いかけを「役割志向のわかまえの発話」(role oriented *wakimae* utterances) と特徴付けた。英語会話においては、教師と学生の問いかけの頻度や使用に大差はない。話題提供を促す問いかけは、教師、学生ともに、相手の話題選択の自由を確保するように発せられる。話題展開においては、相手の意見を引き出す問いかけが用いられる。このように、教師と学生は、対等に個人の意思を尊重するやり方で問いかけを行う。一方、日本人の教師は、学生の約 2.3 倍の頻度で用いる問いかけを通じて、話題選択、話題展開の舵取りをしながら、学生が話しやすいように導いていく。話題展開においては、教師が熱心なあいづちなどを通じて学生の話話を盛り上げ、学生の発話を先取りして、話のクライマックスを一緒につくる問いかけも観察された。他方学生は、教師の話話の選択や展開に大きく影響を及ぼす問いかけを回避する傾向にある。こうした問いかけの使用は、親が子を導き、子が親に導かれるような、日本社会において上下関係にある二者に慣習的に期待される親子関係を模した役割 (cf. Lebra 1976; 中根 1978) への「わかまえ」によるものと考えられる。

第五章では、親しい学生同士による英語と日本語の会話をデータとして、経験談を共有する過程における言語使用を分析した。英語会話では、経験談を受ける聞き手が語り手に対して、質問、感嘆の表示、コメント、類似の経験の提示 (story rounds) を行い、聞き手と語り手の間で各々の意思に基づいた情報をやりとりする「高関与の情報交換」(high-involvement style of information exchange) が観察される。一方、日本語会話では、語り手が語る経験談をもとに、

語り手と聞き手が一つのストーリーラインを融合的に紡ぐ「融合的談話」(merging discourse)が起きる。高密度の「共話」と言えるものである。そこでは(1)「繰り返し」、(2)相手が言いそうなことを先取りして言う「先取り」、(3)相手の発話に強く関連することを追加していく「付け加え」、(4)相手の発話の一部に自分の発話を重ねて言う「言い重なり」が集中的、連続的に生じる。これらは互いを引き込み合い、同調の高まりとして現れると考えられることから、総称して「相互引き込み発話」(induced-fit utterances)と呼ぶ。相互引き込み発話は聞き手と語り手の双方から起こり、互いの発話が絡み合う。相互引き込み発話のやりとりには、意思を伝える情報はほとんど含まれない。そこで行われているのは「共感の交感」(communion of empathy)である。

第六章では、特に Brown and Levinson (1978, 1987) の理論を取り上げ、彼らの理論が、「わきまえ」の言語使用(第四章)と「融合的談話」(第五章)を適切に説明するには不十分であることを論じた。社会的行為を「理性的」・「非理性的」行為に二分した Weber/Habermas の社会行為類型論(宮原 1987)に従えば、慣習によるところの大きい「わきまえ」の言語使用、共感の交感を主とする「融合的談話」は、Brown and Levinson が議論の対象から除外した非理性的行為に相当する。一方で、彼らはあらゆるタイプの言語使用を理性に還元しようと試みた。ここに方法論的矛盾がある。Brown and Levinson の理論は、もともと「わきまえ」の言語使用、および「融合的談話」を適切に議論の俎上に載せることができないパラダイムなのである。同時にそれは、理性主義の現代社会科学全般の限界を表してもいる。

続いて、既存の語用論理論を補うアプローチの一つとして、清水(2003, 2004)、Hanks(2016)、Otsuka(2011)らが、哲学者西田幾多郎らの考えをもとに発展させた「場の思考」を導入した。語用論理論の根底にある始源的な自己および自他分離の考えとは異なり、「場の思考」は、あらゆる存在は「場」という全体の部分として繋がり関係しあっているという自他非分離に始まり、今この「場所」における関係性の中で、たとえば子の前では親に、親の前では子になるように、自己が「分節化」(articulation)し、発現すると考える。「場の思考」は、そのような自己のはたらきを「場」の内側から捉える「内的視点」(inside perspective)をとる。さらに、自他が繋がりがながらも、個々が固有のはたらきをするメカニズムを「自己の二領域性」(dual mode thinking)と「即興劇モデル」(improvisational drama model)(清水 2003, 2004)の思考装置によって説明する。「自己の二領域性」は、自己とは、認識(頭脳性)を担う明在的な「自己的自己」(egocentric domain)と知覚(情動・身体性)を担う暗在的な「場所的自己」(basho domain)の二領域からなるとみなし、「即興劇モデル」は、自己の二領域のはたらきが即興的なコミュニケーションの共創を可能にすると考えられるものである。特に「場所的自己」の領域は、自己と他者間でその波動が互いに同調して整合的な状態を生み出しながら融合し、二者間で共有され、「場の共有」をもたらすという点で重要である。

「場の思考」により、「わきまえ」の言語使用は、会話者が社会的役割をもった自己として「分節化」した結果として解釈される。つまり初対面の二者は、会話の「場所」において、一方が教師という社会的役割をもち、他方が学生という社会的役割をもつことにより、個々の自

己として発現する。そこには、今この「場所」で何が求められているかに対する感知としての「わきまえ」がはたらいっている。教師、学生という相補的な社会的役割関係をもって発現した自己と自己による初対面の会話は、スムーズに安定して行われる。

「融合的談話」においては、二者が互いに同じことばを繰り返すことで、各々の「場所的自己」の波動が同調し、その共有が促進される。情動・身体性を担う「場所的自己」の共有、即ち「場の共有」により、共存在感覚と身体的共鳴性が高まる中、相手の発話のその先が予期され、自ずと先取りが起こる。また、相手の感覚が感じられ、相手の発話に強く関連する発話を付け加え、切れ目のないストーリーラインをつないでいく。さらに、相手の発話に思わず引き込まれるように、言い重なって同じことを言う。ここでの親しい二者の会話の目的は、個々の意思のもとで情報を伝えあうことではなく、相手の経験に共感し、共存在感覚を愉しむことなのである。

このように、英語との対照によって顕在化した日本語会話の特徴である「わきまえ」の言語使用と「融合的談話」の論理は、「場の思考」によって、話者が「全体の部分として話す」(speaking as parts of a whole) ことにあると説明できる。これは、理性的な動作主が意図・認識に基づいて話すことを前提とした既存の語用論理論では、なされえない解釈である。

第七章では、語用論における「場の思考」の意義を論じた。理性的な動作主としての自己を中心に据える語用論理論は、「わきまえ」の言語使用や「融合的談話」の現象を「非理性的」行為として議論の死角に追いやった。そのようにして適切な説明がなされていない現象は、日本語に限らず、英語をはじめとする諸言語にあるものと思われる。既存の語用論理論とは異なり、自己を全体の中の部分として捉える「場の思考」は、それらの議論の死角におかれた言語使用に光を当て、説明を与える枠組みを備えている。「場の思考」をもって既存の語用論理論を補完し、言語使用を解釈しなおすことは、人間のコミュニケーションへのより深い理解をもたらし、さらに、より豊かな普遍性を有した語用論を構築することになる。

本研究は、以上のように、実証的手法により、日本語会話の言語使用の特徴は「全体の部分として話す」という論理で説明されることを「場の思考」に基づいて論じたものである。

論文審査結果の要旨

論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ英語（以下、「英語」とする）との対照を通じて顕在化する日本語の言語使用の特徴を明らかにしたうえで、既存の語用論理論が、それらの特徴、および、その根底にある論理を適切に説明するには不十分であることを指摘し、さらに、既存の語用論理論を補完する考えとして「場の思考」（清水 2003, 2004; Hanks 2016; Otsuka 2011）を取り入れ、日本語談話の解釈を試みるものである。

論文は、全文 278 ページ（本文 258 ページ、参考文献 20 ページ）であり、構成は、以下の通りである。

Chapter I	Introduction
	1.1 Motives of the Study
	1.2 Aims of the Study
	1.3 Outline of the Study
Chapter II	A Review of the Literature
	2.1 Introduction
	2.2 Major Theories of Pragmatics
	2.3 Japanese Conversational Phenomena Which Major Theories of Pragmatics Cannot Explain Well
	2.4 Summary
Chapter III	Data
	3.1 Introduction
	3.2 Mister O Corpus
Chapter IV	Questions in English and Japanese Conversation with Social Distance: Individualistic Volitional Utterances vs. Role Oriented <i>Wakimae</i> Utterances
	4.1 Introduction
	4.2 Review of Literature on Questions
	4.3 Data and Procedure
	4.4 Question-asking in English and Japanese Conversation
	4.5 Discussion
	4.6 Summary
Chapter V	Story Sharing in English and Japanese Conversation without Social Distance: High-Involvement Style of Information Exchange vs. Merging Discourse
	5.1 Introduction
	5.2 Data and Analytic Focuses
	5.3 Story Sharing in English Conversation
	5.4 Story Sharing in Japanese Conversation
	5.5 Individualistic Volitional Utterances in High-Involvement Style of Information Exchange vs. Communion of Empathy in Merging Discourse
	5.6 Summary
Chapter VI	Discussion

	6.1 Introduction
	6.2 What Major Theories of Pragmatics Leave Unexplained
	6.3 A Complementary Approach: <i>Ba</i> -based Thinking
	6.4 Interpretation of Japanese Discourse using <i>Ba</i> -based Thinking: Speaking as Parts of a Whole
	6.5 Summary
Chapter VII	Conclusion
	7.1 Overview
	7.2 Toward a Richer Universality of Pragmatics
	Bibliography

第一章では、本研究の動機と目的として、既存の語用論理論の前提では説明しきれない日本語会話の諸現象を説明する新たな理論の導入の必要性を説く。ブラウンとレビンソンのポライトネス理論などに代表される既存の語用論理論は、一様に「会話行為の理性的性質」を大前提とし、コミュニケーションは「意図・認識」に基づき理性的に「方策」を選択するというように、あらゆるタイプの発話を理性に還元しようとするものである。英語会話においては、個々の意思に基づく情報伝達が重視されることから、その言語使用の大部分は既存の理論によって説明される。一方、日本語会話には、それらの理論的前提にそぐわない現象がたびたび観察される。こうした現象は、各々が自分の発話を完結させる英語の「対話」と対比して、「共話」（水谷 1993）と呼ばれてきた。共話的な話し方の基本は、複数の話者が対立することなく混然一体となって一本の流れのある談話をつくるというものである。このような日本語会話における言語使用の特徴は、既存の理論だけではなく、新たな理論を導入することによって、より適切に説明されると思われる。本研究は、それを可能にする方法の一つとして、自己と他者は深いレベルで繋がり、「場」という全体の部分としてはたらいっていると考える「場の思考」を取り入れる。

第二章では、語用論がデカルト派言語学者であるノアム・チョムスキーの徹底した理性主義の肩の上に立っていることを指摘したのち、語用論を牽引してきたグライス (1975) の「会話の含意」、レイコフ (1973)、リーチ (1983)、ブラウンとレビンソン (1978, 1987) らによるポライトネス理論を概観し、それらが理性主義を貫くものであることを論じている。次に、このような既存の語用論理論をもって適切な説明ができないと思われる日本語の現象として、「共話」（水谷 1993）、および、社会的慣習によるところの大きい「わきまえ」（井出 1989）の言語使用を挙げ、それらに関わる先行研究を提示している。

第三章では、本研究で使用するデータであるミスター・オー・コーパスについて説明する。ミスター・オー・コーパスとは、言語使用の異言語異文化比較を目的として同一条件を設定して収集した日本語、英語を含む六言語の談話資料である。初対面の教師と学生、親しい学生同士の二種類のペアによる三種類の談話（会話、課題達成談話、語り）の映像と書き起こしが収

録されており、本研究では、これらの中から教師と学生、学生同士のペアの日英語会話を分析データとして使用することを述べている。

第四章では、初対面の教師と学生による英語と日本語の会話における問いかけを分析し、英語の問いかけを「個人志向の意思に基づく発話」、日本語の問いかけを「役割志向のわきまへの発話」と特徴づける。英語会話においては、教師と学生の問いかけの頻度や使用に大差はない。話題提供を促す問いかけは、教師、学生ともに、相手の話題選択の自由を確保するように発せられる。話題展開においては、相手の意見を引き出す問いかけが用いられる。ここでは、教師と学生は、対等に個人の意思を尊重するやり方で問いかけを行っている。一方、日本人の教師は、学生の約 2.3 倍の頻度で用いる問いかけを通じて、話題選択、話題展開の舵取りをしながら、学生が話しやすいように導いていく。話題展開においては、教師が熱心なあいづちなどを通じて学生の話話を盛り上げ、学生の発話を先取りして、話のクライマックスを一緒につくる問いかけも観察される。他方学生は、教師の話話の選択や展開に大きく影響を及ぼす問いかけを回避する傾向にある。こうした問いかけの使用は、日本社会において上下関係にある二者に慣習的に期待される親子関係を模した役割への「わきまえ」によるものと考えられる。

第五章では、親しい学生同士による英語と日本語の会話をデータとして、経験談を共有する過程における言語使用を分析している。英語会話では、聞き手が語り手に対して、質問、感嘆の表示、コメント、類似の経験の提示を行い、聞き手と語り手の間で各々の意思に基づいた情報をやりとりする「高関与の情報交換」が観察される。一方、日本語会話では、語り手と聞き手が一つのストーリーラインを融合的に紡ぐ「融合的談話」が起きる。高密度の「共話」と言えるものであり、「繰り返し」「先取り」「付け加え」「言い重なり」が集中的、連続的に生じる。これらは互いを引き込み合い、同調の高まりとして現れると考えられることから、総称して「相互引き込み発話」と呼ぶ。相互引き込み発話は聞き手と語り手の双方から起こり、互いの発話が絡み合う。相互引き込み発話のやりとりには、意思を伝える情報はほとんど含まれない。そこで行われているのは「共感の交感」である。

第六章では、ブラウンとレビンソン (1978, 1987) の理論が、「わきまえ」の言語使用 (第四章) と「融合的談話」 (第五章) を議論の俎上に載せることができないパラダイムであることを説く。彼らの理論によれば、慣習によるところの大きい「わきまえ」の言語使用、共感の交感を主とする「融合的談話」は、非理性的行為に相当するため、あらゆるタイプの言語使用を理性に還元しようと試みた議論からは除外される現象となり、そこに彼らの理論の限界がある。そこで、既存の語用論理論を補うアプローチの一つとして「場の思考」を導入する。「場の思考」により、「わきまえ」の言語使用は、会話者が会話の「場所」において社会的役割をもった自己として「分節化」した結果として解釈される。また、「融合的談話」においては、二者の「場の共有」により、共存在感覚と身体的共鳴性が高まる中で、二者が一人の人の発話であるかのように、切れ目のないストーリーラインをつないでいく。ここでの親しい二者の会話は、個々の意思のもとで情報を伝えあうことではなく、相手の経験に共感し、共存在感覚を愉しむことなのである。

このように、本論文は、英語との対照によって顕在化した日本語会話の特徴である「わきまえ」の言語使用と「融合的談話」の論理は、「場の思考」によって、話者が「全体の部分として話す」(speaking as parts of a whole) ことにあると説明する。これは、理性的な動作主が意図に基づいて話すことを前提とした既存の語用論理論ではなされえない解釈であると主張する。

第七章では、結論として、語用論における「場の思考」の意義を論じている。理性的な動作主としての自己を中心に据える既存の語用論理論は、「わきまえ」の言語使用や「融合的談話」の現象を「非理性的」言語行為として議論の死角に追いやった。そのようにして適切な説明がなされていない現象は、日本語に限らず、英語をはじめとする諸言語にもあるものと思われる。既存の語用論理論とは異なり、自己を全体の中の部分として捉える「場の思考」は、議論の死角におかれたそれらの言語使用に光を当て、説明を与える枠組みを備えている。「場の思考」をもって既存の語用論理論を補完し、言語使用を解釈しなおすことは、人間のコミュニケーションへのより深い理解をもたらし、さらに、より豊かな普遍性を有した語用論を構築することになると説いている。本研究は、以上のように、実証的手法により、日本語会話の言語使用の特徴は「全体の部分として話す」という論理で説明されることを「場の思考」に基づいて論じたものである。

論文審査の要旨と結果

審査委員会では本論文の積極的に評価できる学術的価値として以下の見解が表明された。

本研究は、英語を始めとする西欧の言語の分析をもとに発展してきた語用論の理論的モデルは世界の言語のすべてを分析するには不十分であり、これを補完するための全く異なる枠組みが必要であるということを理論的、実証的に論じた上で、新たな「場の思考」を説得的に提案することに成功している。

理論的には、欧米の言語文化を基礎として構築された既存の語用論理論のルーツを近代科学の祖デカルトにまで遡り、俯瞰的にその特徴を明確にしようとする試みによって、本論文の基幹となる「場の思考」の導入の必然性を説いている。日本語をベースにしたこのような試みは、人文科学の分野においてインパクトをもつものとなっており、本論文を評価する要因の一つとなっている。

実証的には、まず、二種類の異なる日英語会話を比較することによりそれぞれの特徴を顕在化させ、その違いを明示的に示したことで比較分析という手法が有効な方法論であることを明らかにしている。そこで明らかになった日本語会話における上下関係間の問いかけを「わきまえ志向の意思に基づく発話」と特徴づけ、「場の文化」を背景に長い歴史を経て培われてきた日本の言語的コミュニケーションの根幹に触れる指摘を行っていることは重要な論点であろう。一方、「融合的談話」は、「相互引き込み発話」により、即興的にストーリーが進んでいくことを示した。これらは、それぞれの会話が、話し手と聞き手の明示的な上下関係や明確な意志のもとに言葉が使われるというよりは、むしろ、場に自身を開き、場から自身を捉えることによって進行していることを明らかにしたものである。このことにより、「場の思考」の適用の正当

性を裏付けたことは納得のいくところである。

このような理論的、実証的根拠のもとに、既存の語用論を補完する「場の思考」の提案をしたことは、本論文の注目すべき、独創性の高い点であり、語用論研究史への貢献といえる。日本の哲学思想の系譜としての西田幾多郎の流れも含めた思考体系である「場の思考」は、西欧では学問的基盤としての基体が「個人」にあるのに対して、日本では「場所」にあるとする考えである。本論文では、「場の思考」を具体的な分析に導くことを可能にしている清水博による三つの基本的思考要素（内在的視点、自己の二領域性、即興劇モデル）を紹介し、それらが、日本語の談話分析にどのように援用され、その現象の解釈を可能にしているかを説得的に論じている。このように、日本語会話の諸現象の解釈のために新たな理論を導き出したことは注目すべき点である。

本論文の結論では、「場の思考」に基づき、日本語会話の言語使用の特徴を、「全体の部分として話す」という論理で説明されると総括している。この点は、昨今の科学技術においても注目されており、それに基づいた生命システム論やコミュニケーションシステム、および身体的インタフェースの研究が既に展開されている。しかしながら、言語的コミュニケーションの現場において、場の思考・理論をとりこんだ研究はまだ数少ない。そこに果敢に挑戦し、その有用性と妥当性を示した本論文の価値は評価に値する。

以上、本論文の評価すべき主要な点をあげたが、審査委員会では、以下のような質問や批判も出された。まず、データについて、その全体像が見えにくいとの指摘があった。分析結果の章で提示されている例の他に、同じような例がどの程度あるのか、あるいはないのかなど、量的な数字を示すなどの必要性が指摘された。また、「融合的談話」の特徴として挙げられている「共話」に見られる諸現象は、日本語会話の特徴として周知であるが、それらに相当する英語会話の諸現象の有標性を明確にすることにより、日本語会話との異同がより明確になるとの意見が出された。さらに、「場」という概念が *context* や *situation*, *place* 等の概念とどのように異なるのかについてのより詳しい説明がほしいところであるとの指摘があった。2017年8月3日に開催された公開審査会においては、このような点について質疑応答がなされ、論文執筆者は自己の主張を明快に述べると同時に、問題点や課題の指摘に対し、的確な返答を行った。

本論文は、このような大小の問題点は指摘できるものの、本節冒頭でも述べたとおり、英語を始めとする西欧の言語の分析をもとに発展してきた語用論の理論的モデルを補完する新たな理論を提示し、それをもとに、日本語会話の諸現象を論じることに成功しており、今後の言語研究に新たな可能性を示唆する独創的な論文であるとの評価を得た。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士学位論文に相応しいものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことを報告するものである。